第１０章　財政政策とその有効性

第１節　ケインズの財政政策

（１）大恐慌とケインズ

アダム・スミス　古典派経済学

→自由放任

1930 年代　**大恐慌**

ケインズ

→賃金には「**下方硬直性**」が存在するために市場にまかせていては失業は解消できない

不況期には、政府が公共事業をおこなうことで「**有効需要**」を創出すべき

不況期　　公共投資　減税

好況期　　増税

「**ハーベイ・ロードの前提**」

（２）ケインズ・モデル

$Y=C+I+G$　　(10-1)

$C=a+b(Y-T)$　　(10-2)　　消費関数

$T=\bar{T}$　　(10-3)　　定額税

$$Y=\frac{1}{1-b}\left(a-b\bar{T}+I+G\right) \qquad (10\text{-}4)$$

数値例

$b=0.8$、$a=50$、$I=50$、$G=100$、$\bar{T}=100$

$Y=1/(1-0.8)\times(50-0.8\times100+50+100)=5\times120=600$

$Y=1/(1-0.8)\times(50-0.8\times100+50+120)=5\times140=700$

$Y = 1/(1-0.8) \times (50 - 0.8 \times 80 + 50 + 100) = 5 \times 136 = 680$

$$\Delta Y = \frac{1}{1-b} \Delta G$$

$$\frac{\Delta Y}{\Delta G} = \frac{1}{1-b} = \frac{1}{1-\text{限界消費性向}} \qquad (10\text{-}5)$$

（３）ビルトイン・スタビライザー

$Y = C + I + G$ （10-6）

$C = a + b(Y - T)$ （10-7） 消費関数

$T = tY$ （10-8） 租税関数

$$Y = \frac{1}{1-b+bt}(a + I + G)$$

$$= \frac{1}{1-b(1-t)}(a + I + G) \qquad (10\text{-}9)$$

$$\Delta Y = \frac{1}{1-b(1-t)} \Delta I$$

$$\frac{\Delta Y}{\Delta I} = \frac{1}{1-b(1-t)} \qquad (10\text{-}10)$$

第２節　財政政策の有効性について

（１）ＩＳ－LM分析

投資関数　$I = d - e\,r$

$Y = C + I + G$ （10-11）

$C = a + b(Y - T)$ （10-12） 消費関数

$I = d - er$ （10-13） 投資関数

$T=\overline{T}$ （10-14） 定額税

$$r = -\frac{(1-b)}{e} Y + \frac{a - b\overline{T} + d + G}{e}$$ （10-15） IS 曲線の式

$M=L$ （10-16） 貨幣市場の均衡式

$L = kY + (g - hr)$ （10-17） 貨幣需要関数

$$r = \frac{k}{h} Y - \frac{(M-g)}{h}$$ （10-18） LM 曲線の式

$$Y = \frac{1}{1-b + ek/h} \left[a - b\overline{T} + d + G + \frac{e(M-g)}{h} \right]$$ （10-19）均衡国民所得の決定式

（２）数値例にもとづく財政政策の効果

数値例 a ＝ 46、b=0.6、d=40、e=6、g=30、k=0.3、h=9

政府支出G＝ 10、マネーサプライ M ＝ 30、定額税 $\overline{T}$ ＝ 10

$$r = -\frac{1}{15} Y + 15$$ （10-20）

$$r = \frac{1}{30} Y - \frac{(30-30)}{8}$$

$$r = \frac{1}{30} Y$$ （10-21）

となります。この式は、切片がゼロで、傾きが 1/30 の１次関数となります。

均衡国民所得の水準は、(10-19)式に上記の数値例を代入すれば求まりますが、ここで

は(10-20)式と(10-21)式を使って計算してみます。この２つの式からｒを消去すると

$$-\frac{1}{15}Y+15=\frac{1}{30}Y$$

となります。この式を整理すると

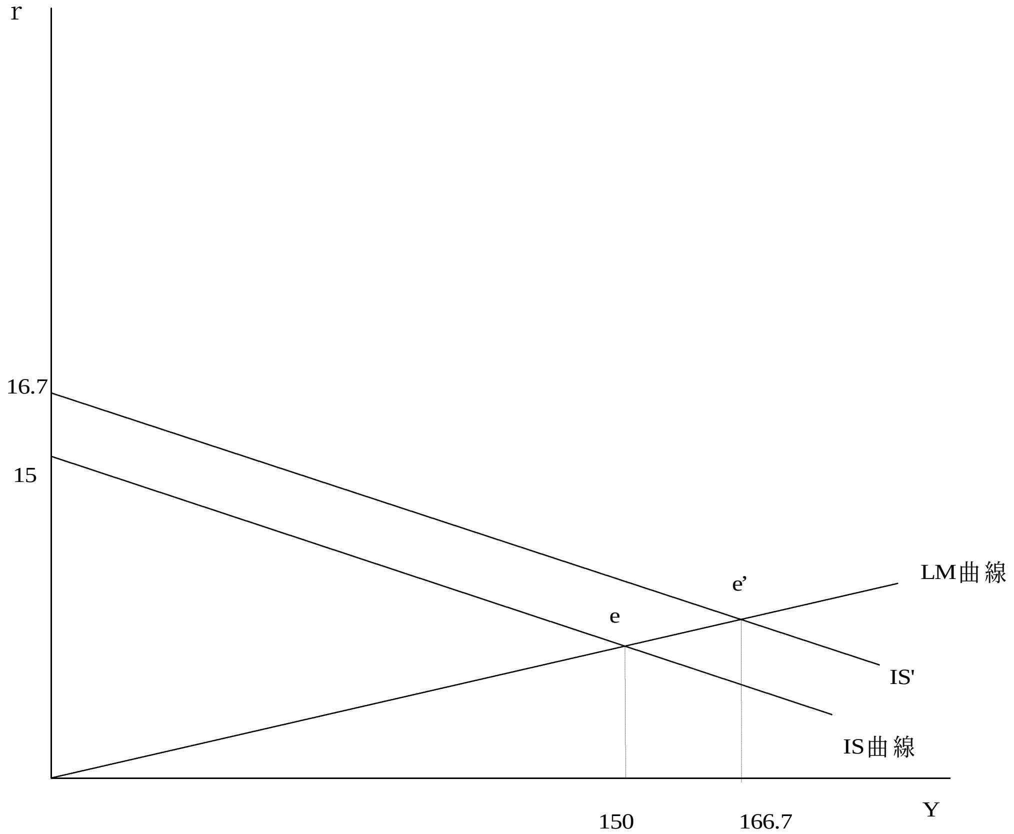
$$15=\left(\frac{1}{30}+\frac{1}{15}\right)Y$$

$$15=\left(\frac{1}{30}+\frac{2}{30}\right)Y$$

15 ＝（３／30）Y

Y=150

図 10-1　IS-LM 分析における政府支出拡大の効果



政府が政府支出 G を 10 だけ増加

$$r = -\frac{1}{15}Y + \frac{46-0.6\times 10+40+\mathbf{20}}{6} \quad (10\text{-}22)$$

$$\frac{100}{6} = \frac{1}{10}Y$$

1000=6Y

Y= 166.666・・・

$$\frac{\Delta Y}{\Delta G} = \frac{1}{1-b+ek/h} \quad (10\text{-}23)$$

$$\frac{\Delta Y}{\Delta G} = \frac{1}{1-0.6+6\times 0.3/9} \quad (10\text{-}24)$$

=1.666

定額税を 10 だけ減少

$$r = -\frac{1}{15}Y + \frac{46+40+10}{6} \quad (10\text{-}25)$$

$$= -\frac{1}{15}Y + 16$$

$$16 = \frac{1}{10}Y$$

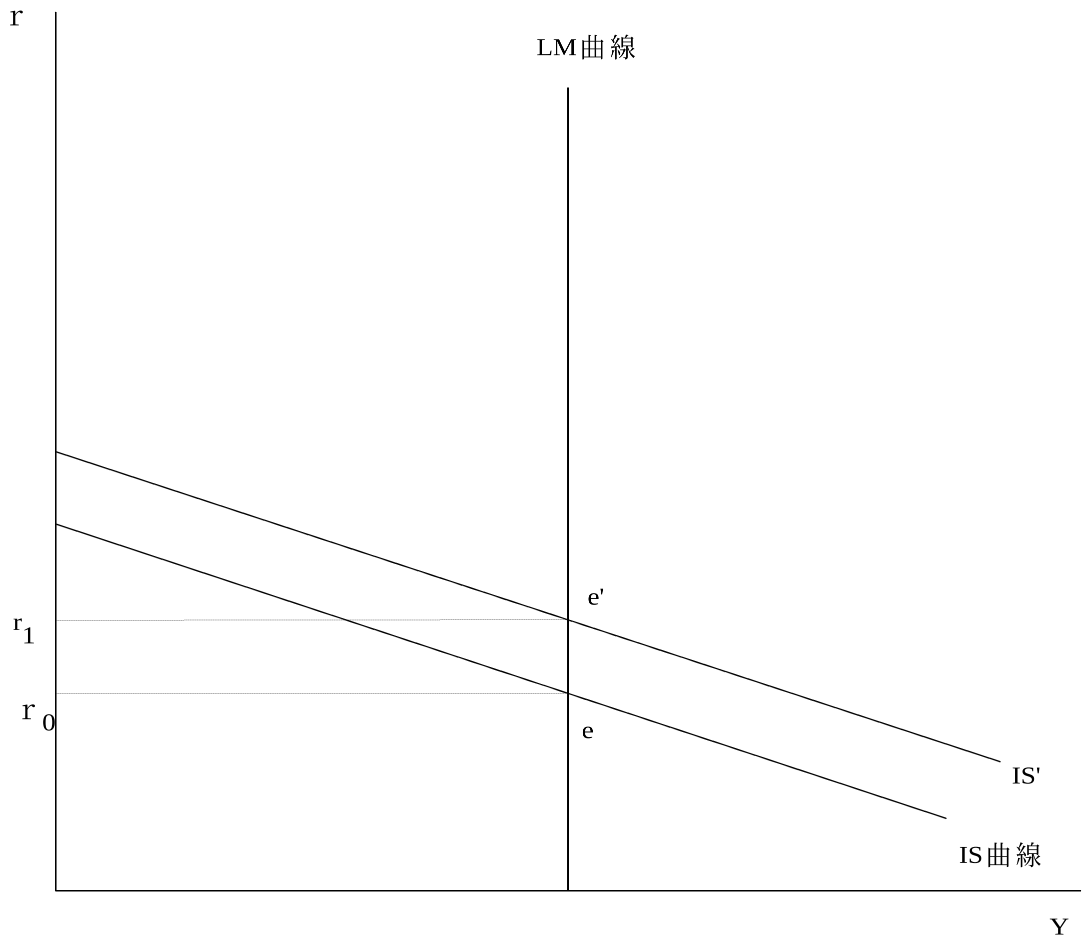
Y=160

$$-\frac{\Delta Y}{\Delta T} = \frac{b}{1-b+ek/h} \quad (10\text{-}26)$$

$$-\frac{\Delta Y}{\Delta T} = \frac{0.6}{1-0.6+6\times 0.3/9} = 1 \quad (10\text{-}27)$$

（３）ケインジアンとマネタリストの論争

図 10-2　財政政策が無効なケース



クラウディグアウト

（4）資産効果

資産効果

公債発行は、家計からみると、資産の増加

↓

家計の消費にプラスの影響

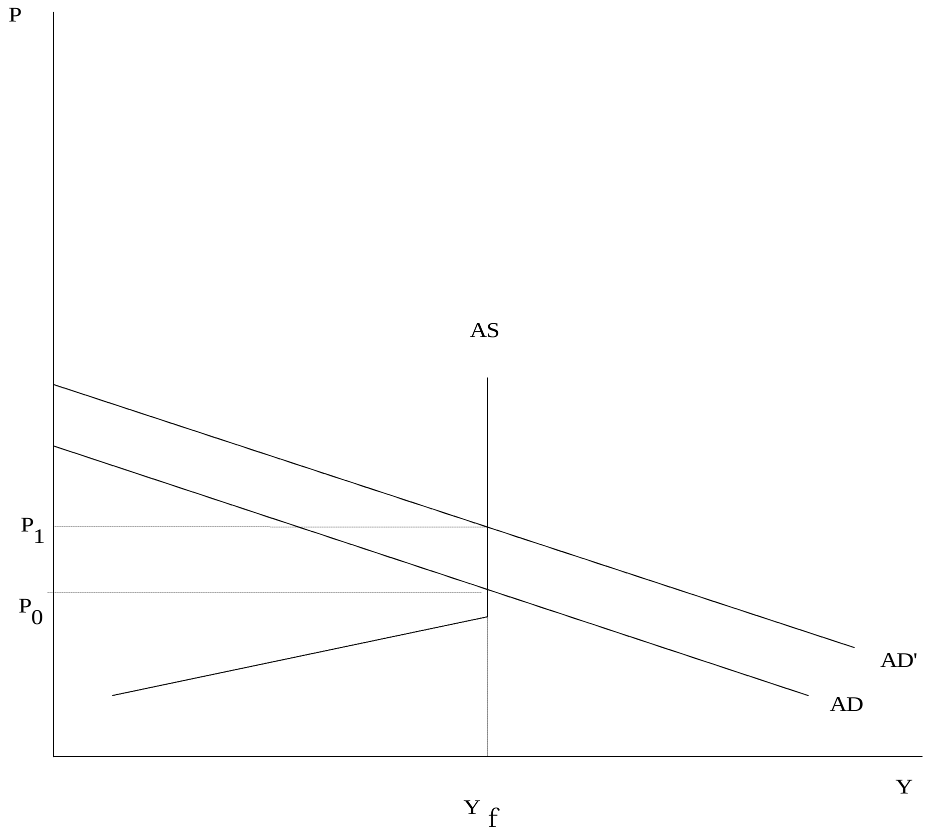
貨幣需要も増加

↓

ＬＭ曲線は左上方へシフト

（５）総需要・総供給

図 10-3　総需要曲線と供給曲線



（６）合理的期待形成

ルーカス、サージェント、バロー　**合理的期待形成**論者

↓

公債の発行は、将来の増税をもたらすことを家計が予測するために、その政策の効果は消滅

（７）ブキャナン・ワーグナーの批判

ブキャナン→ケインズ政策の非対称性を指摘